句集

箱火鉢

原田達夫

ブリキ缶の雑な鳴子を引いてみる

十七音の短詩である俳句。俳句にこめた作者の思いがふっと読者の心に伝わることがある。
その醍醐味をこれからも楽しみにしていきたい。

〈あとがき〉より

ウエップ

目交ぜして軽々かぶる獅子頭

百の灯の暮らしありけり寒の川

衾雪軒低くして人住まふ

唐招提寺展

金堂解体隅鬼（すみおに）に春まぶしかろ

（金堂の軒下四隅で隅木を支える鬼形像。邪鬼とも）

かぎろひの電車でこぼこでこぼこと

花を見てゐることは生きてゐること

千鳥ケ淵戦没者墓苑

火の色の陶棺置かる花馬酔木

これがじやがいもの花かと母のいふ

神輿舁く男らはみな半眼に

不揃ひの音たててゐる若葉雨

くちぼその死は睡蓮の葉の上に

月囓ることもありなむ夜盗虫

太刀魚をひかり引き抜くやうにかな

秋黴雨指の先まで投函す

間引菜の束ねるほどはなかりけり

皀莢は老いの頑固さぶらさぐる

輪飾りの藁のにほひのしるきかな

鷹一過して一点のわれの老い

どの顔にもさくらの火照りありにけり

しやぼん玉歪んだ顔のまま放つ

わが視線そらさずにゐる孕鹿

山古志・闘牛

牛角力ほいさほいさと勢子囃す

出雲崎

ほととぎす佐渡まで海の真つ平

青蛙おのれを消してゐるつもり

相馬の野馬追

野馬追の武者連なりて農夫貌

正坐してこくり八月十五日

ぎくぎくと危険察知のやんまの眼

己が目のまづ映るなり箱眼鏡

法華経寺・薪能

太郎冠者のこゑも金色小望月

まみむめも女菊師の指使ひ

沼小春あぶく吐き出す奴がゐる

こけし談義や土産物屋の箱火鉢

西域七句

陽関に立つ茫々とただ炎気

白日傘羊の群の渡るまで

夏没日塔克拉瑪干（タクラマカン）は碧く透く

瑠璃蜥蜴刃物の街でナイフ買ふ

絣織る少女の髪の秋桜

怯ゆる目満つ炎天の家畜市

西域を去る回鶻（ウイグル）の夏帽子

力もて川は流るる去年今年

こぼれてはふくら雀となりにけり

白鳥の馴れなれしさに惑ひけり

春の日の老人と鯉知己なりし

韓国

梵鐘を低きに吊れり雑木の芽

たまゆらの波光か銀のてふてふか

ルアー釣り春の虚空を裂きながら

花に飽きまた花に寄る一日かな

虚子庵のガラス戸越しのゆがむ夏

鎌倉は本降りとなる余花残花

興福寺阿修羅展

蠅虎捉ふる阿修羅六つの目

豊年を呑み込んでゆくコンバイン

惚けても惚けても母かりんの実

勝鬨橋がつがつと揺れ冬に入る

大北風や吃水深く漁船着く

白息にまみれトロ箱下ろす漁夫

トロ箱に鱈長々とありにけり

焼藷を闇取引のやうに買ふ

粥柱口まではこぶ母白寿

馬跳びのうまよろけをり春の土

雲うつす水凹まして蘆の角

えごの花地味を着こなす人と会ふ

田の桝に水がうがうと夏つばめ

えへらえへら赤鱈泳ぐ早さかな

さみだるる家持の海暮れにけり

かまつかや母の目の色ふともどる

こんなにもしづかにつるむ揚羽蝶

補聴器の土砂降りとなる秋の蟬

母逝く　二句

凜として母新月に旅立ちぬ

蠻蛄鳴いて小さき母を納棺す

夕月の大大と色なかりけり

雪の朝檜葉の香りの湯の溢れ

大間崎

海峡の暗きに冬の日矢の立つ

春泥にまだ堅き底ありにけり

人気なきテーラー春の生地見本

青むものあをむ八十八夜かな

増上寺・八百年御忌

木遣り唄花の中ゆく僧の列

嵌め絵のやう空埋めゆく欅の芽

下総の山並みやさし桐の花

当麻寺　二句

双塔は山のふところ青時雨

畦道を辿り尼寺ひめぢよをん

じんわりと花鰹反る冷奴

軽自動車は棺のかたち秋はじめ

草津

湯の花の匂ひただよふ駅暑し

目ばかりの少年のかほ終戦日

青森・深浦　四句

朝霧や熊の爪痕あらたなる

山毛欅林閑かに木の実落とすなり

落日に燃えてゐるなり稲穂波

銀漢に列なる漁りありにけり

蟷螂の枯れのおよばぬ楕円の眼

新東京駅

縦の世の新駅よこへ延びて冬

大寒の塊となるピアノかな

山茱萸の雫は雨の色のまま

宮古島　三句

碧瑠璃の海にしつかと春の島

風光る珊瑚礁てふ泡立て器

蛇穴を出づ国境の海昏し

抱つこ紐に子と春を入れ急ぎ足

疎開児も浮浪児も老ゆ花の下

頬杖のはづれてゴリラ春深し

斑猫も砂の女ももうゐない

夏めくや貨車は昭和の音立てて

夏霧や馬車の音する駅逓所

犬の子の甘噛み痛し遠花火

朝露に深く溺れて蝶のあり

土門拳の浮浪児写真長き夜

秋しぐれ尾崎一雄の靴と下駄

秋の雲寝ころぶ堅さありさうな

冬落暉島燃え尽きてしまひけり

荒れし田の土塊うざうざ凍つるなり

悪尉になるやもしれず八十の春

バーナーを手にうろうろと野焼かな

夕空のひかりを奪ふ代田かな

大き虹の底にぽつんと筑波山

あめんぼの狩一瞬の水輪かな

噴水の水余らずに落ちてをり

ブリキ缶の雑な鳴子を引いてみる

さざなみを濡らしてゆけり秋の雨

へこへこと動く蝗の袋かな

山車廻す秋の日まはす轍跡

秋の海まなこ平たくして眺む

騙し絵展出づれば釣瓶落しかな

十二月どぶから湯気が立つてゐる

会津・柳津

雪女郎いくたりもゐて野風呂かな

われ初詣妻福袋そんなもの

嘴の痕残る金柑春近し

そこいらは空の飛び地か犬ふぐり

五島列島

殉教の島をおほへり藪椿

春寒し聖書置かるる信徒席

幾人の蹠をのせし踏絵かな

固まりて切支丹墓つくしんぼ

退屈な蛤ひゆうと水飛ばす

禿頭のマヌカン春を着こなせり

いつの間に蓬摘む人遠ざかる

引き算に尻取りに飽きのどかなり

揚雲雀降り来るときも囀れり

若葦の果て大利根の分流す

みんなみにみな尻向けて草むしり

木(こ)の晩(くれ)や看経漏れ来奥の院

完

著者略歴

原田達夫（はらだ・たつお）

1934年（昭和９年）東京日本橋に生まれる
1995年（平成７年）ＮＨＫ文化センター柏教室で俳句を学ぶ
1996年（平成８年）『鳴』入会
1999年（平成11年）『鳴』同人

句集に『虫合せ』（平成17年）

句集　箱火鉢
2015年8月20日　第1刷発行
著　者　原田達夫
発行者　池田友之
発行所　株式会社　ウエップ
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-24-1-909
電話　03-5368-1870　郵便振替　00140-7-544128
印　刷　モリモト印刷株式会社

※定価はカバーに表示してあります　ISBN978-4-904800-32-4